

聖書：ヨハネの福音書 11：38～44

説教題：ラザロよ、出て来なさい

日時：2023年4月9日（イースター記念朝拝）

今日開いているヨハネの福音書 11 章はマルタとマリアの兄弟ラザロの生き返りを記している章です。2 年前のイースター礼拝と昨年のイースター礼拝で今日の箇所前の部分を読みました。今日はその続きです。そしてここはこの記事のクライマックスとなる部分です。これまでの箇所を簡単に振り返ると、11 章 1 節にあった通り、ベタニアの町にラザロという人がいました。この人が病気にかかっている、その姉妹であるマルタとマリアはイエス様に使いを送って知らせましたが、イエス様はすぐに出発なさいませんでした。4 節でイエス様は「この病気は死で終わるものではなく、神の栄光のためのものです。それによって神の子が栄光を受けることとなります。」と言い、なおそこに二日間とどまられました。そのため、イエス様がベタニアに到着した時にはラザロは死んでしまっていました。イエス様がこのようにされたのは 5 節にマルタとマリアとラザロを愛していたからだとして記されています。一見矛盾する言葉のようです。愛しているなら、すぐ飛んで行って癒やしてあげれば良いのにと私たちは思います。しかし行ってすぐ癒やすよりもはるかにまさる祝福を与えようとして、イエス様はこのようになされたのです。

イエス様が到着するとラザロは墓の中に入れられてすでに四日経っていました。まず迎えたのは姉のマルタでした。彼女はイエス様に「主よ。もしここにいてくださったなら、私の兄弟は死ななかつたでしょうに」と言います。そんな彼女にイエス様は、言われました。25～26 節：「わたしはよみがえりです。いのちです。わたしを信じる者は死んでも生きるのです。また、生きていてわたしを信じる者はみな、永遠に決して死ぬことはありません。あなたは、このことを信じますか。」 イエス様は死という厳しい現実を前にしてもご自身を信じ続けるようにと招かれました。そしてついに墓の前まで来たということから今日の箇所は始まります。

まずこの墓の前における人間の姿から見て行きたいと思います。ここで最初に名が記されているのはマルタです。イエス様が「石を取りのけなさい」と言った時、彼女は 39 節で答えました。「主よ、もう臭くなっています。四日になりますから。」当時のユダヤでは死後三日間は魂が体に戻って来ることがあり得るという考えがあったよ

うです。しかし四日目ともなれば、その可能性は全く消え去る。パレスチナの暖かい気候のもとでは確実に死体は腐敗し始めます。そこでマルタは反対したわけです。「主よ、それはなさない方が良いと思うのですが」と。ここに死を前にして一切の希望を失っている人間の姿があります。

そんな彼女にイエス様は 40 節で言われました。「信じるなら神の栄光を見る、とあなたに言ったではありませんか。」これは前のやり取りを受けたものです。イエス様はマルタに会って 23 節でまずこう言われました。「あなたの兄弟はよみがえります。」マルタはこれに対して答えました。「終わりの日のよみがえりの時に、私の兄弟がよみがえることは知っています。」マルタはよみがえりはこの世界の終わりの日、最後の日にのみ起こることと考えていました。それは遠い将来の話であって、今の私たちに関係することではないと。そんな彼女にイエス様は先ほどお読みした言葉を語られたのでした。「わたしはよみがえりです。いのちです。わたしを信じる者は死んでも生きるのです。また、生きていてわたしを信じる者はみな、永遠に決して死ぬことはありません。あなたは、このことを信じますか。」イエス様はこうして目の前に立っているご自身に信頼するようにと語りかけました。それに対してマルタは 27 節で「はい、主よ。私は、あなたが世に来られる神の子キリストであると信じております。」と答え、イエス様を約束の救い主キリストとして信じているという告白はしました。しかし十分な信仰には立っていなかったことが 39 節から分かるのです。イエス様は 40 節で言われました。「信じるなら神の栄光を見る、とあなたに言ったではありませんか。」イエス様はこの状況でもなおご自身に信頼するようにと彼女を招かれました。そしてここに「信じることを通して人は神の栄光を見る」という順番のあることをイエス様は示されました。参考になるのは詩篇 81 篇 10 節です。「あなたの口を大きく開けよ。わたしがそれを満たそう。」神は私たちを祝福してくださいますが、そのために私たちが口を大きく開けることが求められます。それを開かなければ、神は祝福を注ぎ込むことができません。同じ原則を否定面から表す言葉としてマタイの福音書 13 章 58 節をあげることができます。「そして彼らの不信仰のゆえに、そこでは多くの奇跡をなさらなかった。」不信仰であるなら、神のみわざを体験することはできなくなるのです。神のみわざは信仰を通して、その人に注がれます。ですからイエス様はマルタに、なおご自身に信頼するようにと言われました。幸いなことにマルタはそれに応答します。41 節に「そこで、彼らは石を取りのけた」とありますが、これはマルタの指示によってそうしたということでしょう。マルタはすべてが分かったわけではありませ

んが、イエス様に信頼し、イエス様の言葉に従いました。そこに驚くべきみわざ、まさに神の栄光を見るとイエス様が言われたみわざが行われて行ったのです。

さてでは人々が希望を失っていた墓の前でイエス様はどんな態度であられたかを次に見て行きたいと思います。ここに四つのお姿を見ることができます。一つ目として38節に「イエスは再び心のうちに憤りを覚えながら、墓に来られた」とあります。昨年見た33節にも「霊に憤りを覚え」という言葉がありました。この憤りは死が人間を支配している現実に対する憤りでしょう。人間は本来死ぬために神に造られたのではありませんでした。人間は神とともに永遠に生きるために、豊かないのちに生きるために造られました。しかし罪のために人間は死を刈り取る者となり、このように嘆きと叫びに覆われています。イエス様はその現実に接して「涙を流された」と前回の箇所にありましたが、墓の前に来られた時、いよいよ憤りを覚えられたのです。そして人間をこの状態から救い出そうとする思い、死の力と戦おうとする思いをいよいよ強くされたのです。

二つ目にイエス様は39節で、墓の「石を取りのけなさい」と言われました。これはご自分が入るためではありません。この後見ると分かりますように、イエス様は墓の外から声をかけるだけです。ですからこれはラザロが出て来るための準備です。イエス様がこれからされるみわざは、生きている人が墓の中に入るというものではなく、反対に墓の中にいる人が命を与えられて、自ら外に出て来るというみわざなのです。

石を取りのけた後、三つ目にイエス様がされたことは、目を上げて父なる神と話されたことでした。ここから私たちは大事なことを学びます。マルタや人々の問題は困難にばかり目をやっていたことでした。目に見える現実にはばかり目をやっていました。それとは対照的にイエス様は目を上に上げられました。そこに私たちの問題の解決と救いがあるということです。イエス様はここで「父よ、わたしの願いを聞いてくださったことを感謝します」と言われました。つまりイエス様はこのことについてすでに祈っておられました。ラザロの病気について知らされた最初の時、11章3節の時点から祈っておられたのでしょうか。その祈りを経て祈りは聞かれているとイエス様は語っておられます。そういう意味では、厳密に言えば、イエス様はここでそのことについて祈られたのではありません。このように話すのは周りにいる人たちのためだとイエス様は言っています。人々がイエス様こそ神が遣わされた方、救い主であることを信

じるようになるためにと。イエス様は神に祈り、神との一体のつながりの中で、これから大きなみわざを行います。これによって人々がイエス様こそ神が遣わした救い主であることを知るように！とイエス様は言っています。言い換えれば神の祝福にあずかることを求めるならイエス様のもとに来なければならぬということです。神の祝福はイエス様というチャンネルを通してこそ与えられるのです。

そうして四つ目にイエス様は大声で「ラザロよ、出て来なさい」と叫ばれました。この大声は権威を持っている方としての声です。するとどうなったでしょうか。死んでいたラザロが自ら墓から出て来ました！手と足は長い布で巻かれたまま、また顔を布で包まれたまま！イエス様はこれまで病人を癒やしたこと、あるいは死んだ直後の人を生き返らせたことはありました。しかし死後四日経った人、すでに布に巻かれて墓に葬られていた人、朽ち果てるプロセスの中にあつた人をよみがえらせたのは初めてです。なぜイエス様にこのようなことができるのでしょうか。ただ言葉を発するだけでこのように事を行われる姿は天地創造の神の姿を思い起こさせます。神が「光、あれ」と仰せられると、光がありました。私たちの言葉にはそのような力はありません。ここにイエス様の神としての力が示されています。しかしそれだけではありません。人間が死の力の下に置かれているのは人間の罪の結果です。ですから義である神は、この罪の問題を不問にしてただ人をいのちに生かすことはできないのです。イエス様にこのわざができるのは、イエス様が私たち人間の罪をその身に背負って十字架にかかってくださることと関係します。十字架はこれからですが、それを確実になすお方として、人間の罪をご自身にすべて引き受けるお方として罪人を死の力から解放放つことのできる権威を持っておられたのです。イエス様は人々に「ほどいてやって、帰らせなさい」と言います。ラザロは自分でほどこことはできなかったのでしょうか。彼は人々の助けを必要としました。これによって人々は本当にあのラザロが生き返ったのだということを直接見て、触って知る確かな証人ともなったのでしょうか。

今朝私たちはイエス様の復活を祝ってイースター礼拝をささげています。もしイエス様が十字架にかかって死んで、それだけだったら、イエス様は本当に私たちの身代わりを果たすことができたのかどうか分からないことになってしまいます。むしろそのわざは成功しなかったのでイエス様はなお死の力の下に閉じ込められたままなのだということになります。しかしイエス様はこの日によみがえられました！この出来事の内にはイエス様の身代わりのわざは成功した！ということがはっきり示されてい

ます。イエス様は私たちが受けるべき罪の罰を完全に受け切ってくださいだったので、死はもはやイエス様の上にそれ以上の請求権を持たず、イエス様を死に閉じ込めておくことができなくなったのです。イエス様はこうして死を無力化し、死の力に打ち勝って、よみがえられたのです。そしてご自身により頼む者たちを確かに死の力から解放し、永遠のいのちに生かす権威を持つ方とられたことをはっきり示されたのです。

最後に今日の箇所は今日の私たちにどんなメッセージを持っているのか、二つのことを見て終わりたいと思います。まず一つ目はイエス様は最後の復活の日に先立って、今日この時も私たちにまことの命に生かすことのできる救い主であられるということです。マルタはイエス様がくださる救いを遠い将来のこととしてのみ考えていました。それはいわば漠然とした淡い期待のようなものでした。しかしイエス様は、信じる者は今ここで「よみがえりであり、いのちであるイエス様」から祝福を受けることができると言われました。今日招詞で読んでいただいたヨハネの福音書 5 章 24～25 節にこうあります。「まことに、まことに、あなたがたに言います。わたしのことばを聞いて、わたしを遣わされた方を信じる者は、永遠のいのちを持ち、さばきにあうことがなく、死からいのちに移っています。まことに、まことに、あなたがたに言います。死人が神の子の声を聞く時が来ます。今がその時です。それを聞く者は生きます。」これはまさに今のことです。イエス様を信じる者は「死からいのちに移っている」と今ここで実現していることとして言われています。確かに地上の生涯の最後に私たちは肉体的な死を経験しなければなりません、その死によって妨げられることのない永遠のいのちに今ここにある時から生き始めることができるのです。

もう一つのことは、この世界の終わりの日、主の再臨の日に起こる最後の復活です。先ほど読んだヨハネ 5 章の続きである 28～29 節にこうあります。「このことに驚いてはなりません。墓の中にいる者がみな、子の声を聞く時が来るのです。そのとき、善を行った者はよみがえっていのちを受けるために、悪を行った者はよみがえってさばきを受けるために出て来ます。」こちらは明らかに世の終わりにおける復活を述べたものです。イエス様が今日の箇所で「ラザロよ、出て来なさい」と大声で叫ばれたように、やがて墓の中にいる者がみな、その声を聞く時が来る。その声を聞いて復活させられ、イエス様に信頼する者たちは永遠のいのちに生かされる者となる。今日見たラザロのよみがえりの出来事は、このやがて起こることを象徴的に示しているものです。そして言うまでもなく、ここに書かれていることにはるかにまさる祝福がその

日に実現することになります。

私たちはこのことを信じる者でしょうか。イエス様は言われました。「わたしはよみがえりです。いのちです。わたしを信じる者は死んでも生きるのです。また、生きていてわたしを信じる者はみな、永遠に決して死ぬことはありません。あなたは、このことを信じますか。」 また今日の箇所で言われました。「信じるなら神の栄光を見る、とあなたに言ったではありませんか。」 この祝福は信じる者に与えられます。私たちは復活の主イエス様を信じて、この世にある時からまことのいのちに生かされ、そしてやがての日に復活のからだを与えられて永遠に生きる者とされることを楽しみに待ち望む歩みをする者とされたいと思います。またマルタとマリアが愛するラザロを取り戻して再会する喜びに生かされたように、私たちも地上での別れを経験しなければならぬとしても、ともに主を信じて、愛する者と天の御国で再会し、永遠にともに歩むことができる、その祝福に向かって進む者とされたいと思います。